【博士論文要約】

『詩經』解釋史研究　――鄭風諸篇を中心に――

東北大學大學院文學研究科文化科學專攻
髙崎　駿士

目次

序章　――研究の目的と概要――

第一章　漢唐詩經學における「歴史化」――鄭風諸篇を中心に――
一、はじめに
二、「歴史化」――歴史故事に基づいて解釋される詩篇
二―一、莊公に關する詩篇
二―二、文公に關する詩篇
二―三、昭公に關する詩篇
三、おわりに

第二章　漢唐詩經學における「準歴史化」「類歴史化」――鄭風諸篇を中心に――
一、はじめに
二、「準歴史化」――歴史故事との關連が不明な詩篇
二―一、桓公・武公に關する詩篇
二―二、莊公に關する詩篇

二―三、昭公に關する詩篇
二―四、厲公に關する詩篇
二―五、「準歴史化」による詩篇解釋のまとめ
三、「類歴史化」――陳古刺今と亂世の鄭國を詠う詩篇
三―一、莊公に關する詩篇
三―二、昭公に關する詩篇
三―三、厲公に關する詩篇
三―四、「類歴史化」に關する詩篇のまとめ
四、おわりに
第三章　鄭風子衿篇解釋史考――漢代から清代を中心に――
一、はじめに
二、漢・唐代の解釋
三、宋代の解釋
三―一、宋代の小序に據る解釋――毛傳からの派生
三―二、宋代の小序に據る解釋――鄭箋からの派生
三―三、宋代の解釋――小序を排除する場合
四、元代の解釋
五、明代の解釋
五―一、元代の繼續
五―二、明末の狀況――先行する注釋の檢討
六、清代の解釋

七、おわりに
第四章　鄭風溱洧篇解釋史考――漢唐詩經學から朱熹の淫詩説までを中心に――
一、はじめに
二、漢唐代詩經學の溱洧篇解釋
三、溱洧篇の構造的把握
四、爲政者に對する諷刺
五、鄭國の風俗と詩篇内容の差別化
六、韓詩説への着目
七、淫奔者自身のことばとみなす解釋
八、おわりに
第五章　補足：『毛詩注疏』卷第四・四之二　鄭風・緇衣篇譯注稿
全體のむすびにかえて
論文初出

****

本研究は、歴代の『詩經』解釋が時代や解釋者ごとにどのような特徴を有し、いかに變遷していったのかについて、鄭風諸篇に限定して考察を試みたものである。

詳しくは第一章で言及しているが、歴代詩經學の展開において、特に、漢唐詩經學と宋代詩經學の違いは、それぞれ「歴史化」と「文學化」という特徴から捉えるのが通説となっている。宋代詩經學の文學化は、小序の信頼性への疑義、言い換えれば、漢唐詩經學の歴史化に對する批判的檢討の過程で生み出された側面があり、こうした文學化を特に推し進めたのが南宋の朱熹（一一三〇―一二〇〇）だといわれる。朱熹は、小序に基づいて展開された古注を、詩篇を强引に歴史故事に關連付けて解釋した附會の說だと批判し、周南・召南を除く十三國風の諸篇に「里巷歌謠」としての性格が備わっていることを指摘する。さらに、『論語』の「鄭聲淫」說に基づいて、鄭風諸篇を中心として淫詩說を展開する。先行研究は、こうした朱熹の『詩』解釋態度をもって、漢唐詩經學の經學として解釋から、詩篇の抒情性に着目した文學化への轉換期を見出そうとする。

本研究が鄭風諸篇に着目して檢討を試みた理由は、宋代以降、とりわけ批判的に多樣な解釋の可能性が追究されてきた鄭風諸篇に對して、漢代以來の『詩經』解釋の基本となる古注には、どのような特徴と問題とが内包されているのか、そして、その特徴や問題を宋代以降の『詩經』研究がいかに超克しようとしたのか、を明らかにするためである。本研究は、『詩經』全體に對する概括的な檢討ではなく、歴代の解釋の變遷に影響を與えたであろう鄭風諸篇の個別の事例に卽して、より具體的な解釋の變遷の實態を見出すという點で、『詩經』解釋史研究における意義をもつと考える。

各章の概要については、以下の通りである。

第一章　漢唐詩經學における「歴史化」――鄭風諸篇を中心に――

南宋の朱熹が淫詩說をとりわけ展開していった鄭風諸篇は、歴代解釋の分岐が多く、多樣な解釋の可能性が追究されてきた詩篇群である。そのため、漢唐詩經學の歴史化から宋代詩經學の文學化への

展開において、鄭風諸篇はその中心的論點となる詩篇群だと考えられる。

そこで、宋代詩經學の文學化が展開していく前段階の、漢唐詩經學の歴史化の實態を明らかにし、その特徴と問題點について考察するため、小序の具體性と、小序と詩篇内容の解釋の整合性とに着目し、鄭風諸篇における「歴史化」（小序が具體的な歴史故事や人物名に言及し、それに依據して詩篇内容が解釋される詩篇）についての檢討を行なった。

第一章の結論として、「歴史化」に分類した六篇については、一つに、小序をはじめとして、毛傳、鄭箋、『正義』と展開するにつれて、次第に具體的な歴史故事に重ね合わせられた解釋が提示される傾向を有していること、二つに、『左傳』には語られない物語を詠う詩篇として解釋される場合（②將仲子篇、③叔于田篇、④大叔于田篇）や、小序や歴史故事と詩篇内容との間に齟齬があるために、詩篇の背景に『左傳』の故事とは異なる物語を加えて解される場合（⑤清人篇、⑫狡童篇）、詩篇内容を虚構であると意識的に捉えて解される場合（⑨有女同車篇）といった三つのパターンがあることを論じた。

第二章　漢唐詩経学における「準歴史化」「類歴史化」――鄭風諸篇を中心に――

第一章に引き續き、漢唐詩經學の歴史化の特徴に關する問題として、鄭風諸篇を「準歴史化」（小序が人物名に言及するものの、詩篇内容と具體的な歴史故事との關連が明らかでない詩篇）、「類歴史化」（小序は歴史故事や人名について明言しないものの、歴史的背景を想定した詩篇解釋がなされている詩篇）の二つの分類について檢討を行なった。

結論として、「準歴史化」に分類した諸篇においては、歴史上の人物と詩篇内容との關連が指摘される一方で、具體的な歴史故事については明確な言及をすることが避けられていたり、史書には記載

されない物語が創造されていたりしており、小序と詩篇内容とを繋ぐ根據が「歴史化」の詩篇に比べて曖昧なものになっていることを論じた。また、「類歴史化」に分類した諸篇においては、『詩譜』によって詩篇創作の背景や時代が想定されるものの、その具體的な歴史故事には言及されず、あたかもそうした出來事があったかのように語られている狀況を論じた。

　從來指摘されてきた漢唐詩經學の歴史化とは、小序と史書（とりわけ『左傳』）にみえる歴史故事との符合性に注目するものであった。しかしながら、詩篇自體が史書に記されない歴史性を背景に含んだ史料として捉えられ、諷刺や教訓といった漢唐詩經學における經學的な解釋の志向性をも含みつつ、小序、毛傳、鄭箋、『正義』がそれぞれに「文學的な感性」をもって紡ぎ出そうとした物語創造の營みとしての側面をも有していたことを、示唆していよう。だとすれば、漢唐詩經學と宋代詩經學の違いを、それぞれ「歴史化」と「文學化」と捉えるのではなく、ひとまずは、本稿が檢討してきた鄭風諸篇に限定して漢唐詩經學の特徴を考えるならば、「歴史化」を伴う「文學化」、と捉えたうえで、宋代詩經學の變遷を個々の詩篇解釋の狀況を檢討することを通して、見直していく必要がある。

　あわせて、漢唐詩經學の問題は、朱熹らによる宋代詩經學における批判の矛先となり得るものであるが、特に「類歴史化」で取り上げた詩篇では、朱熹の淫詩説にも連なるような、男女の情事が詠われていると解される場合も散見された。朱熹の解釋に對して「抒情性」を見出そうとする觀點の一つに、先行研究が淫詩説を指摘しているが、だとすれば、すでに漢代においても、詩篇の主題ではなく、詩篇自體の解釋において「抒情性」ある解釋が試みられていたことになる。この點もまた、先行研究の把握に對する再檢討を要する問題である。

第三章　鄭風子衿篇解釈史考――漢代から清代を中心に――

第三章では、鄭風・子衿篇に關する、漢代から清代までの代表的な注釋を取り上げて、各注釋の特徴と注釋間の影響關係とについて、時代ごとに整理檢討を行なった。詩篇を限定して通史的に詩篇解釋の變遷を辿ることで、一篇の詩篇に對する歷代解釋に多樣なバリエーションや注釋同士の連關性があること、或いは、各注釋者がいかに詩篇を解釋したのかという恣意性などについて、具體的な狀況をうかがい知ることができる。各注釋が『詩經』をいかなる書物として捉え、『詩經』全體を如何なる傾向で解釋していったのか、という概括的な問題については、先行研究によってすでに檢討が進められている。第三章は、そうした先行研究の成果に依據しつつ、子衿篇解釋の實態を檢討した試論である。

子衿篇に對する漢・唐代の解釋は、小序の「學校の廢るを刺る」が、毛傳、鄭箋、『正義』で共通の主題として扱われつつ、子衿篇本文の解釋は、毛傳と鄭箋とで異なっていた。續く宋代は大きく三つの傾向から分析した。一つ目の「三―一、宋代の小序に據る解釋――毛傳からの派生」では、程頤（一〇三三―一一〇七）、南宋の嚴粲（生卒年不詳、十二世紀）、戴溪（生卒年不詳、十二世紀）らの解釋が、毛傳からの派生として位置付けられることを述べた。二つ目の「三―二、宋代の小序に據る解釋――鄭箋からの派生」では、歐陽脩（一〇〇七―一〇七二）、蘇轍（一〇三九―一一一二）、范處義（生卒年不詳、十二世紀）らの解釋が、鄭箋からの派生として位置付けられることを述べた。三つ目の「三―三、宋代の解釋――小序を排除する場合」では、王質（一一二七―一一八八）と朱熹の解釋を取り上げ、ともに小序を排除する立場だが、王質は曹操の「短歌行」によって小序に據らずに子衿篇を解釋し、一方、朱熹は「鄭聲淫」という『論語』の評價を子衿篇に適用していることを述べた。

元代に至ると、朱熹の『詩集傳』の解釋をそのまま引用する梁寅（一三〇三―一三八九）の『詩演義』や劉瑾（一三二四―一三七〇頃）の『詩傳通釋』、或いは、朱熹の解釋には觸れずに宋代の解釋を襲うのみの胡一桂（生卒年不詳、十四世紀）の『詩集傳附錄纂疏』や李公凱（生卒年不詳、十四世紀）の『直音傍訓毛詩句解』があるが、解釋の展開は見られなかった。

明代もまた元代と同じような狀況が續くが、明末にかけて、徐々に小序や『朱傳』に對する批判や檢討が出てくる。小序に對する批判は、季本（一四八五―一五六三）の『詩說解頤』や朱謀㙔（生卒年不詳、十六世紀）の『詩故』にみえ、他方、小序に據りつつ、『朱傳』を批判する解釋が、徐光啓（一五六二―一六三三）の『毛詩六帖講意』や郝敬（一五五八―一六三九）の『毛詩原解』にみえる。

そして、清代に至ると、朱熹の解釋に對する批判が朱鶴齡（一六〇六―一六八三）の『詩經通義』にみえ、李光地（一六四二―一七一八）の『詩所』では朱熹のみなず、小序による解釋にもは批判的になって、獨自の解釋が提示されていた。小序に根據が無いとする立場は、姚際恆（一六四七―一七一五）の『詩經通論』にみえ、清末の方玉潤（一八一一―一八八三）の『詩經原始』にも受け繼がれていく。他方で、毛傳と鄭箋の違いを指摘する議論も多く、毛傳に據る解釋は、陳啓源（生年不詳、卒年は一六八九）の『毛詩稽古編』や馬瑞辰（一七八一―一八五三）の『毛詩傳箋通釋』にみえ、鄭箋に據る解釋は、胡承珙（一七七六―一八三二）の『毛詩後箋』や嚴虞惇（一六五〇―一七一三）の『讀詩質疑』にみえた。このように、朱熹の『詩集傳』をも含めた先行する注釋への批判的檢討が、明末清初の時期に積極的に行われていた狀況を論じた。

第四章　鄭風溱洧篇解釋史考――漢唐詩經學から朱熹の淫詩說までを中心に――

第四章では、鄭風・溱洧篇に關する、漢代から南宋の朱熹に至るまでの代表的な注釋を取り上げて、各注釋の特徵と注釋間の影響關係を檢討している。基本的な方針は第三章を踏襲する。ただし、溱洧篇は漢代より鄭國の「淫」らな風俗を詠った詩篇だと捉えられており、朱熹の淫詩說の形成に影響を與えた詩篇の一つだと考えられる。第四章は、漢唐詩經學による古注から南宋の朱熹による新注が形成されるに至るまでの、諸解釋の展開を整理、檢討したものである。

そもそも鄭風諸篇を「淫」とみなす一因となった「鄭聲淫」説について、先行研究では、孔子がいう「鄭聲淫」の本來の意味とは何か、班固や許愼の言説をどう評價するべきか、「鄭聲淫」が後世にいかなる影響を與えたか、などが主に檢討されている。それらをまとめると次のようになる。一般に、「鄭聲」とは鄭國の音樂を指すが、その意味する範疇は「鄭衞の音」「新聲」「淫聲」といった春秋時代以降に民閒で生まれた新興音樂をも含み、宮廷内で演奏されていた「雅樂」と對立する音樂を指したことばだと考えられている。孔子にとって『詩』は「雅樂」の範疇にあるはずであり、よって、「鄭聲淫」は「雅樂」に對立する音樂を「淫」と評したものだと解するのが大方の見解である。

朱熹が淫詩説を提示する根據となったであろう詩篇の一つ、溱洧篇の歷代解釋の變遷について、檢討・整理を行ない、結果として、北宋期には各解釋者の「兵革」や男女の在り方への認識の違いによって議論が展開されている狀況や、續く南宋期では古注とは異なる系統とされる、韓詩説や『論語』の「鄭聲淫」説が取り込まれ、多樣な解釋の可能性が追究されていく狀況を論じた。

具體的には、取り上げた歷代解釋の展開は、①鄭國の風俗の特徵を主に溱洧篇によって捉え、『論語』衞靈公篇の「鄭聲淫」と關連付ける説（班固、許愼）、②鄭國の三月上巳の禊祓の俗との關連を指摘する解釋（韓詩）、③「兵革」の不斷、男女の離散、「淫風」の流行といった鄭國の「亂」に對する諷刺詩とする解釋（小序）、④詩篇に詠われる男女の「淫」らな風俗に對する諷刺詩とする解釋（鄭箋、『正義』）、⑤詩篇内容を詩人と詩篇中の人物のことばとに分ける構造的把握の提示（歐陽脩）、⑥「淫」となる原因である「兵革」を行なった爲政者に對する諷刺と捉える解釋（王安石）、⑦詩篇に詠われる内容を「禮」に適う行爲と捉える解釋（范處義）、⑧韓詩説にいう禊祓の俗との關連を指摘する解釋（王質）、⑨淫奔者が自ら詠った淫奔詩とみなす解釋（朱熹）となる。

溱洧篇の歷代解釋は、小序の「亂」に對する鄭箋や『正義』の視點の違いを發端として、以降、各解釋者の「兵革」や男女の在り方への認識の違いによって議論が展開されていった。そして、南宋では古注とは異なる韓詩説や『論語』の「鄭聲淫」が取り込まれ、多樣な解釋の可能性が追究されてい

ったことを論じた。

第五章　補足：『毛詩注疏』鄭風　緇衣篇訳注

第五章では、唐朝初期に孔穎達（五七四―六四八）等が太宗の詔敕を奉じて編纂した『五經正義』の一つ、『毛詩注疏（正義）』に基づいて、本論文が研究對象とした、鄭風の初めに配されている緇衣篇の譯注を試みたものである。經學における代表的なテキストである『毛詩注疏』の現代日本語への譯注は、部分的に發表されているが、いまだ完成には至っていない。『詩』學研究の基礎となる漢唐詩經學の成果を十分に取り入れ、研究の精度を高めていくために取り組んだ成果を、本研究の補足として加えた。